

酒田・飽海大豆情報

第3号

令和3年7月15日

生育は順調です!

酒田農業技術普及課

TEL 22-6521

FAX 22-6522

大型化する雑草は今のうちに I 生育は順調 抜き取りましょう!

播種後の高温・少雨のため、圃場間差はありますが、全般に順調に生育しています。また、雑草の発生も少ない状況です。これからも適切な管理で高品質大豆の安定多収を目指しましょう。

【管内の品種別開花期(平年)】

品種	開花期
リュウホウ	7月26日頃
エンレイ	7月28日頃
里のほほえみ	8月1日頃

また、右表を参考にして、病虫害防除の適期判定に必要な開花期を把握しておいてください。開花期は圃場全体の40~50%の株が開花した時です。

II 培土期追肥の検討・実施

すでに6~7葉期に達している圃場もあり、2回目の培土時期を迎えています。これより遅れている圃場でも、6葉期になったら遅れずに培土を実施することが大切です。仕上げ培土なので、初生葉の付け根までゆっくり丁寧に土を盛るようにしてください。

また、生育量が十分でない圃場では、培土作業の直前に追肥を行うことが生育量増大に効果的です。排水不良が原因の場合は、排水対策を徹底した上で実施してください。

培土期追肥については、「酒田・飽海大豆情報(第2号)」(6月10日発行)にも掲載しておりますが、以下に再掲しますので検討してください。

(例)「LPコート70」(緩効性)を20kg(N成分8kg)/10a、または「尿素」(速効性)を9kg(N成分4kg)/10aを全面散布し、その後培土を実施します。

III 子実病害虫防除の徹底

薬剤散布時期の判断には、開花期の把握が必要です。

「紫斑病」: 防除適期は開花後25~35日の間、薬剤は「莢」まで付着するよう丁寧に散布します。

「マメシンクイガ」: 1回目を8月25日頃に紫斑病と同時防除を実施すると効率的です。

さらに、その10日後(9月5日頃)に2回目の防除を実施します。

対象病害虫	防除時期
紫斑病	開花後25~35日頃
マメシンクイガ	①8月25日頃(産卵盛期) ②1回目の10日後



紫斑粒



マメシンクイガ成虫



マメシンクイガの
被害莢・子実

IV アブラムシ類の吸汁害や食葉性害虫の被害が目立つときは

【吸汁性害虫】

ジャガイモヒゲナガアブラムシは、8月以降急激に増加することがあるので、注意して観察し、発生・被害が見られたら、発生初期(写真のように被害が拡大する前)に薬剤を葉裏にもかかるよう丁寧に散布します。



ジャガイモヒゲナガアブラムシ
による吸汁害(黄～褐色化)

【食葉性害虫】

ツメクサガ、ハスモンヨトウ、マメハンミョウなどは、初め圃場の一部分を集中的に食害する傾向があるので、発生を確認したら周囲に広がる前に部分的な薬剤散布を実施することも効果的です。

V これからの雑草対策

タデ類、オナモミ、シロザ等の大型化する雑草は今のうちに抜き取りましょう。また、一部圃場に帰化アサガオ類の発生が見られます。圃場を見廻り、数が少ないうちに抜き取りましょう。特に、実(種)が付く前に抜き取ることで、来年以降の発生を減らすことができます。早めに抜き取り、草との競合を無くすことで大豆の生育が促進され、さらに収穫時の余計な手間を省くことができます。

除草剤を使用する場合はラベルの適用をよく読んで使用してください。湿害による根傷みや、高温(乾燥)が続く場合は薬害が発生する恐れがあります。

**農薬はラベルをよく確認し、適正に使用しましょう。
薬剤散布は風の無い日を選び、周囲への飛散を防ぎましょう。**



作業は涼しい時間帯に!

十分な水分補給で熱中症予防!

自身と周囲に気を配り、声を掛け合って農作業事故防止!